



わたしの原風景②／織茂恭子 2

耳で聞く小さなおはなし⑨「ホンのちょっぴり」／村中李衣、石川えりこ 3

『ありがとう 絵本作家・田畑精一の歩いた道』×『本の力 私の絵本制作秘話』刊行記念特集／いわむらかずお、西巻茅子 4

新刊紹介／佐々木由美子、佐藤まどか 6

おさんぽ自然観察③／いしもりよしひこ 7

イラスト／日紫喜洋子

立ち返る言葉

村上しいこ

私には迷ったときに立ち返る言葉があります。それはデビューして間もなく、日本児童文学者協会新人賞を頂いたとき、古田足日先生がかけて下さった言葉です。懇親会の場で緊張しまくり舞い上がっていた私は、古田先生に、「私もいつか先生のような、ロングセラーを書きたいです」と口走っていました。そんな怖い物知らずの私に、先生はあたたかな声で、けれど厳しい口調でこうおっしゃって下さいました。

「そんなことを考えてはいけません。その時代、その時代を生きている子どもたちに向けて書きなさい」と。

あとの言葉は正確には覚えていませんが、古田先生の作品もその時代を生きていた子どもたちと真剣に向き合った結果生まれてきたのであって、別にロングセラーや、ベストセラーを狙ったわけではないですよと、そんな内容だったと思います。

とにかく迷ったときには、今の時代を生きている子どもたちに向けて作品が書けているか、自問自答します。

数年前から、社会的な要素を多く含んだ児童文学が増えてきました。とりもなおさずそれは子どもたち自身の暮らしが多様化し複雑になっていることを表しています。痛いとかヒリヒリするとか心の^{ひだ}襞までよく描けているとか。そうした言葉が評価として与えられていました。私も頑張って書いていました。けれど昨年夏頃から、どこか違う気がして迷い始めました。コロナ騒動に振り回される子どもたちを見ていると「ちがうよな」と、^{つづ}呟いている自分がいます。オリンピックはやろうとしているのに、プールや運動会や修学旅行は中止。大人は誰も納得出来る説明をしない。無力感の中、児童書は環境問題や高齢社会、貧困や虐待を子どもたちの問題として突きつける。これが本当に意味のある読書体験なのだろうか……。

子どもたちの多くは疲弊しています。それでも、本を読むことは楽しいよ。あの本が面白かったよと私は言ってもらいたい。そうした気持ちの変化の中で、もう一度中学年に向けた作品を「ちゃんと書こう」。そう思って書いたのが、今月刊行される『みんなのためいき図鑑』なのです。

(むらかみ しいこ／児童文学作家)

わたしの原風景

21

織茂恭子

おりも きょうこ／絵本作家



私が生まれた家は高崎の城下町の古着横丁の小さな洋服店だ。戦争が終わって父が帰ってきて閉めていた洋服店を再開した。私は五歳だった。家族は父母姉妹ふたり。しばらく経ってから叔父たちが戦地から帰ってきた。従姉妹も高校を卒業してやってきた。父は快く皆を迎え入れた。狭い我が家は窮屈でにぎやかで楽しくなった。特に楽しいのは真夜中のおなら演奏会だ。おならは実に個性的で、大きい音や小さい音、かわいい音や憎たらしい音、濁った音、澄んだ音……それにトランペットのおならも加わった。面白くてうふふと笑うのは私だけ、みんなぐっすり眠っている。あ、誰かが起きた。母だ。朝一番の早起きはいつも母。ハミングしながら朝食の用意。白いエプロンがよく似合う。洗濯機も掃除機も無い時代だったから家事は全て手作業。大変だと思っけど愚痴一つ言わずいつも笑顔だった。近所の人と話するときもお客さんと話するときも、子どもと話するときもいつも笑顔だった。笑顔は、母の心そのままだった。

ある日、我が家に犬がきた。真っ黒い小犬で、母の笑顔は倍になった。犬小屋を作って店先で飼った。あるとき犬嫌いの客が来ると「フーッ」とにらみつけ、いきなり噛みついた。かすり傷ですんだが、父は友達に頼んで、十キロ離れた川原にこっそり犬を捨ててしまったのだ。どこへ行ったのか、犬は帰ってこない。みんな寝ないで犬を待った。父も待った。わんわんと玄関の戸を烈しく叩く音に、皆の顔がぱっと輝いて急いで戸を開けた。ちぎれんばかりに尻尾を振って飛び込んできた犬を、ぎゅっぎゅっと抱きしめた。よかったよかった。父の顔も笑顔になった。それから店を開けている間は、犬を放してやった。犬は自由になって余程嬉しかったのだろう、素直になって古着横丁にびたりの犬に成長した。ところが突然犬は消えてしまった。それきりいくら待っても、犬は帰ってこなかった。拘束と自由——犬は自由を選んだのに、煮え切らない思いが今も続いている。帰っておいで、もう一度ぎゅっぎゅっと抱きしめてあげるから。

耳で聞く小さなおはなし⑨

「ホンのちょっぴり」

文・村中李衣 絵・石川えりこ

たべてません

散歩していて、道沿いの家のいちじくの実がなっているのを見つけると、胸がざわざわしてくる。そうして、すうっと、小学生の私に戻っていく。

三年二組の教室。先生が怖い顔で腕組みして教室の中を見渡してる。「この中に、昨日学校帰りに、よその家のいちじくを勝手にもいで食べたものがある。だれだ？ 正直に言いなさい」先生はひとりずつ男子の名前を呼んでいく。「あべしんご」阿部くんは、「たべてません」と首を振る。「いしりょう」石井くんも、「たべてません」。先生に名前を呼ばれると、男子たちは次々に「たべてません」と首を振った。でも、阿部くんも石井くんも、上田くんも大中くんもみんな口のまわりが赤くただれてた。「はかたねえ、男子って。まだ青いいちじく食べたから、かぶれちゃってるよ。ウソついてるのバレじゃん」って、美香ちゃんがつまんなそうに言った。でも私、かゆいのを我慢してウソついた男子より、食べられながらこっそり自分の汁でどろぼろにしているのをつけたいちじくの

方がこわかった。

いちじくのなっている家を見つけると、その家に向かって心の中で叫んでしまう。

(もつ食べられますよ。早くとってくださいーい。いちじくどろぼろがやってくる前に、早く早く)

私にとって、いちじくのウソはほろ苦い思い出だけど、『先生、しゅくだいわすれました』に出てくる子どもたちのいろんなウソは、明るくて楽しい。ウソつくのはダメって、ウソついてる人が一番よく知ってる。それでもつか



先生、しゅくだいわすれました
山本悦子・作
佐藤真紀子・絵

なきゃならないウソだったなら、やさしくだまされてアハハって笑ってみるのもいいもんだ。

『ありがとう 絵本作家・田畑精一の歩いた道』

『本の力』 私の絵本制作秘話』刊行記念特集

貫いた平和と
子どもへの思い
いわむらかずお

田畑精一さんと栃木の「いわむらかずお絵本の丘美術館」で対談をしたのは、二〇〇〇年の十一月のことでした。日光男体山の向こうにまっかな陽が沈み、落ち葉が風に鳴る夕暮れ時でした。わたしの「絵本づくり30年展」の記念トークに来ていただいたのです。一般の入館者のほか、ふたりの共通の友人である童話作家の神沢利子さんと絵本作家の西巻茅子さんなども参加してくださっていて、笑いがいつぱいの楽しい会になりました。この度刊行された田畑さんの言葉をまとめた『ありがとう 絵本作家・田畑精一の歩いた道』には、このときのスピーチのなかから抜粋したものが多く含まれています。

六月に、二冊の本が出版されました。一冊は、『おいしいのぼうけん』の作者である田畑精一さんの言葉をまとめた『ありがとう 絵本作家・田畑精一の歩いた道』。もう一冊は、多くの絵本を生み出してきた編集者であり、童心社会長・酒井京子の『本の力 私の絵本制作秘話』です。ともに、新しい日本の絵本の世界が切りひらかれた時代の出来事が描かれています。子どもに真剣に向き合い作品を創っていく姿には、これからの絵本を考える上でも、学ぶところが多いでしょう。

二冊の刊行を記念して、田畑さんと親交の深かったいわむらかずおさん、『えのすきなねこさん』など酒井と一緒に絵本を創ってきた西巻茅子さんに、それぞれ本の紹介をしていただきました。



戦争の時代に少年期を過ごした田畑さんは、「ぼくらの原風景は、夏草が生い茂っていて、工場の鉄骨が焼けただれてあめのようにぐちゃっと曲がって落ちて、赤さびて荒涼としている風景」と語っています。「世界のいたるところで戦争が続いている。数千万人の人が亡くなり、とうとう原子爆弾まで作り出してしまった。そんな大人たちに平和を生み出すことを期待できるだろうか」。ならば、希望は子どもたちだ！ と思いました。そんなふうには平和と子どもについて考えているとき、田畑さんは人形劇と出会い感銘を受け、「原子物理学が人形劇か、ずいぶん悩んだ末に、大学（京都大学）を辞め、人形劇に人生をかける決断をしたのです」。この決断は彼の人生を大きく変え、絵本作家への道へと導いていくのでした。そしておなじアパートに引っ越してきた古田足日さんと出会う奇跡的な巡り合わ

せが重なるのです。「古田足日さんがいなければ、今の田畑精一はなかった」とご自身で語ります。そして『おしいれのぼうけん』や『ダンプえんちようやつつけた』などの共作絵本が誕生するのです。

多くの共作絵本を生み出した後、一九九八年、六十七歳のときはじめての自作絵本『ピカピカ』を発表します。アフリカに取材に出かけるなど精力的な取り組みでした。七十七歳のとき、「子どもの本九条の会」の代表団の一人に加わり、「日・中・韓 平和絵本」の取り組みから生まれた絵本『さくら』が出版されたのは八十二歳のときでした。戦争体験から生まれた平和と子どもへの思いが、田畑さんの人生の信念として貫き通されていったのが分かります。

対談の終わりに神沢利予さんが、田畑さんとの共作絵本『ゆうちゃんのゆうは?』を飛び入りで朗読し、参加者は豊かに心満たされ帰途についたのです。

あの頃のこと

西巻茅子

にしまき かやこ

酒井京子さんが童心社に入社した年、私は絵本を描くようになって三年目、

酒井京子

私の絵本制作秘話

本の力

童心社

右
『ありがとう 絵本作家・田畑精一の歩いた道』
『ありがとう 絵本作家・田畑精一の歩いた道』
実行委員会／編
定価1,320円（本体1,200円＋税10%）

左
『本の力 私の絵本制作秘話』
酒井京子／著
定価1,650円（本体1,500円＋税10%）

『わたしのワンピース』（こぐま社）を描いた年である。あの頃——一九六〇年代の終わり頃から一九七〇年代のはじめにかけて、日本では絵本の出版が始まったばかりであった。一冊の絵本を創るのにどの出版社でも、作家、画家、編集者が必死になっていた時代である。どんな本が良い絵本か？ 定説がない中で、とりあえず一所懸命考え全力を出し合って創っていたのである。激しい議論を重ねて喧嘩になりそうになったこともしばしばだったと、私もこぐま社でのことを思い出す。

子どもたちに受け入れられ、長く読み継がれてきた絵本の多くが、この時代に創られたという事実を、私は長いこと不

思議だと思っていた。何故、あの時期に出版された本が、長いこと子ども達に愛されてきたのだろうか？ その答えが、この本『本の力』には書かれている。

「力のある本というのは、作家と画家、もちろん編集者も、印刷屋さん、製本屋さんも含め、制作に関わったすべての人の

気持ち、ひとつになる瞬間がある——」ほんとうにそうなのだ。その本に関わった全ての人々の熱い心が本の中に入っていて、読者である子どもの心を動かすのだ。ノウハウを持っていないかったけれど、心は熱かったあの時代のまじめな苦労は生きたのである。今の若い編集者には、ぜひこの『本の力』を読んで欲しいと言いたい。

酒井さんは、私にとって良き編集者であると同時に良き友人である。若い頃はよくおしゃべりをした。仕事の話だけでなく、読んだ本のこと、会った人のこと、日常生活のこと、何でも話し合える友人だった。旅行にもよく行った。私の初めてのヨーロッパ旅行は酒井さんと一緒だった。スキーにも行った。私の子どもたちが小さかった頃、子連れのスキーにも同行してくれて、小学生の子どもとも、まともに話し相手をしてくれた。誰ともまともに話し合えるということは、彼女の優れた資質だと思う。

まともに話し合って、作家を理解して、励まして、共に喜び合えるのが編集者であろう。古田さん、田畑さん、いぬいさん、いわむらさん、松谷さん、いわさきさん——みな一流の作家魂を持った人たちである。彼らとまじめに、まともに話し合ってきた酒井さんの姿が目に見え、

せっかく積み上げた積木をがらがらがっしゃーん。ママのスマホをぼーん……。1歳前後は壊したり、投げたり、散らかしたりが楽しい時期。身の回りのモノに興味津々。さわって大丈夫なのか、投げてみたらどうなるのか試しているのです。当然、びりびりも大好き！「これひっぱたらどうなるんだろう。（びりびり）あ、面白い音がした。形が変わった！」赤ちゃんにしてみれば楽しくて仕方ないでしょう。そんな赤ちゃんのやってみたい！がギュッと詰め込まれたのがこの絵本です。黄色い楕円が「びりびり」と裂けて、ページをめくると「びっ」。色とりどりの丸や三角が「びりびりびりびり」で、はりねずみになったり、へびになったり……。ページをめくるたびに、驚きとともに新たな世界が広がり、絵のあたたかさや元気な言葉が相まって喜びと活力が溢れます。

そもそも「びりびり」という濁音と、「びっ」や「ぱっ」という破裂音は、音声学的にみてもエネルギーに満ちた音です。音には意味があり、音から意味の連想が起きる現象を「音象徴」というのだそうです。大きく重い濁音。元気に飛び出す破裂音。破壊と誕生（創造）が繰り返され、最後には「やったね！」というように大満足の「たち」。あー楽しかった。赤ちゃんだけでなく、もう少し大きい子たちも楽しめそうです。早く子どもたちと読み合いたいなあ。

（ささき ゆみこ／東京未来大学教授）



びりびり

中新井純子／作
定価1100円
（本体1000円＋税10%）

「やってみたい！」
が
い
っ
ぱ
い
佐々木 由美子

感想文を書きたくなります！
佐藤 まどか



先生、感想文、書けません！

山本悦子／作
佐藤真紀子／絵
定価1320円
（本体1200円＋税10%）

どうして感想文を書かなきゃいけないの？

おもしろかったじゃダメ？

そう思うみずかに共感する子どもは大勢いるでしょう。

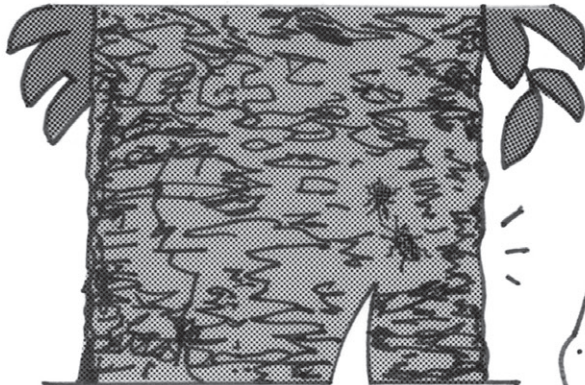
主人公の気持ちになって書いたというあかねと違い、みずかは「誰かの気持ちになってみる」ことができません。そこで、画期的な方法を思いつくのです。主人公に感情移入するため、あかねを主人公にした物語を作って感想文を書くというものです。あかねと一緒に絵話を作っていくシーンが、実に生き生きとしています。子どもならきっとこんな風に物語の展開を考えるんだろうなあ、と、微笑みながら読みました。作戦は見事成功し、みずかはついに主人公の気持ちになることができ、すばらしい感想文を書きあげます。

「誰かの気持ちになってみる」ことは、人間にとって最も大切なことのひとつではないでしょうか。難しいテーマですが、「感想文を書く」という子ども達に身近なイベントを通して、わかりやすく、かつ楽しく描かれています。少しくすぐったい「愛」という言葉も、山本悦子さんの魔法の手にかかると、不思議にすんなりと心に入ってきます。読んでいるうちに、きっとみずかに親しみを感じ、笑い、うなずき、感想文を書きたくなるでしょう！

（さとう まどか／作家）

おさんぽ自然観察 ③

いしもり
よしひこ



しかくじいがかみ

石神井川の遊歩道は桜並木になっている。

桜(ソメイヨシノ)の幹上で、昔はこの辺りにはいなかった2種類の大形カメシロが見られます。元々は外来種です。

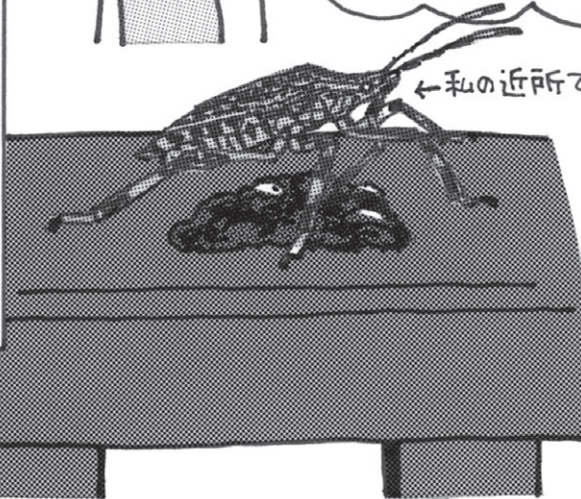


幼虫

成虫



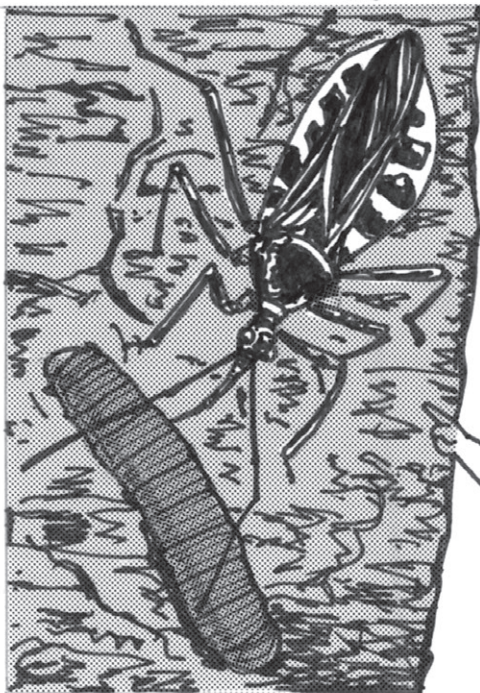
キマダラカメシロ! この虫は
まず江戸時代に長崎の出島にきて
しばらくずっと長崎にしかおらず、
2010年前後に やっと本州でも
見られるようになったんだって。



←私の近所での初見は2015年

川べりの手すりには
落とされた
鳥のフンも
よく吸っています。

私の近所での初見は2009年♪



もう1種類は 肉食性のヨコヅナサシガメ。

細い口吻をイモムシなどに突き刺して体液を吸います。



ヨコヅナサシガメは つやのある黒と
白でとてもカッコイイのだけれど、
羽化した時は体が真っ赤で
その姿も見る価値アリ!
それが見られるのは4月末～
5月前半です。



ヨコヅナサシガメは 昭和初期に 大陸から貨物に紛れて九州に
来て、関東地方で見られるようになったのは、1990年代とのこと。

7月の新刊図書＆紙芝居！

馬場のぼる・へんてこあそびえほん

へんてこひろば おもしろことばで あそぼう！

「ばっかのへ」をさかさに言うとうなる？「へのかっぱ」！
他にも早口言葉やしりとりなど、おもしろい言葉遊びがいっぱい！

くまごろうとちゅうたの あそびえほん いっしょにやってみよう！

へんてこあそびに、いっしょに出かけよう！ さがしっこ、なか
まさかし、めいろ……いろんなあそびがあるよ。やってみよう！

こがようこ／構成・ことば 馬場のぼる／絵

定価 各1430円（本体1300円＋税10%）



イラスト／日紫喜洋子

いっしょにまなぼう！〈きけん〉にそなえる紙芝居

あ、あぶない！

すとうあさえ／脚本 中谷靖彦／絵 全日本交通安全協会／推薦 8場面

ポンポコぽんきち まちにいく

よこみちけいこ／脚本 土田義晴／絵 全日本交通安全協会／推薦 12場面

おおあめ、ゆだんしないで！

キム・ファン／脚本 いしいつとむ／絵 国崎信江／監修 12場面

全6巻セット定価11440円（本体10400円＋税10%）

12場面 定価 各2090円（本体1900円＋税10%） 8場面 定価 各1540円（本体1400円＋税10%）

交通事故に、水害・停電、熱中症に感染症。子どもたちの日常には、さまざまな危険がひそんでいます。
対策を楽しく学んで、安全・健康に毎日をすごしましょう！ 避難訓練や安全教育に広く使えるセットです。

まっくらていでん どうする どうする？

礪みゆき／脚本・絵 国崎信江／監修 12場面

あつひのおばけさん

荻田澄子／脚本 市居みか／絵 藤井祐子／監修 8場面

ウイルスに まけないぞ！

津田真一／脚本 北村裕花／絵 藤井祐子／監修 12場面

単行本図書

みんなのためいき図鑑

村上しいこ／作

中田いくみ／絵

定価1320円（本体1200円＋税10%）



授業参観にむけて、たのちんの班は「ためいき
図鑑」をつくることになった。どんな時にヒト
がためいきをつくのか調べて発表するのだが…。

はんぴりり！〔増補新版〕

③神さまはてんてこまい

廣嶋玲子／作

九猫あざみ／絵

定価990円（本体900円＋税10%）



大晦日に年神さまを招くため、鈴音丸は、たい
せつなお役目「神まねき」を頼られます。果た
してお役目をふじ果たせるのでしょうか？

あとがき

2021年7月15日発行（毎月刊）

母のひろば 第686号

定価50円（年600円／送料とも）

発行所：童心の会

〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6

株式会社童心社内

電話：03（5976）4181

03（5976）4402（編集）

編集発行人：大熊悟

童心社のホームページ：

<https://www.doshinsha.co.jp/>

デザイン：谷口広樹

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。
下記QRコードからもお申し込み
いただけます。見本誌（無料）と振込用
紙をお送りいたします。

見本誌に同封
されている振
込用紙で購読
料をお支払い
いただきます
と、手続き完了
となります。
購読料金は1年分600円（送料とも）。



●6月末、東京池袋で田畑精一先生
の追悼展が開催されました。『おし
れのぼうけん』を始め数々の絵本・紙
芝居の原画、人形劇『猿蟹合戦』など
圧倒的存在感の人形達。雑誌『日本の
学童はいく』の表紙絵1点1点からは
物語が感じられるようでした。まさに
「いのち」を持った子ども達の姿が全
ての作品の中で輝いていました。田畑
先生、ありがとうございました。◎

●この状況下で、東京で五輪・パラ
リンピックを開催することが理にか
なうとは到底思えません。今年の夏
は、自信を持って五輪のテレビを消
そう。代わりに、五輪のために生じた
／これから生じるであろう多くの矛
盾をしっかりと目に焼きつけ、おか
しいことはおかしいと声を上げよう。
それがいまこの国に住む私たちのな
すべきことなのだと思います。㊦